

平成23年度
モビリティ・マネジメント教育（交通環境学習）にかかわる学校支援制度
草加市立川柳小学校 申請概要

(様式 3-2 : 実施結果報告書)

実施結果報告書

1. 学習名称： みんなでつくろう 安全なまち					
2. テーマ： 地域の緊急車両を扱った社会的ジレンマの解決を目指した交通環境学習の実践開発					
3. 実施教科： 社会科					
4. 関連単元： 第4学年「くらしを守る」					
5. 実施単元数： 10時間					
6. 学年	第4学年	7. クラス数	1クラス	8. 生徒数	37名
<p>9. 実施内容</p> <p>①学習指導要領との関連について</p> <p>本実践は、社会科の第4学年の目標（1）「人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚をもつようにする」を受け、地域の人々の安全を守るために関係機関と地域の人々が協力していることや関係機関の人々は様々な工夫や努力をしていること、そして生活環境の維持と向上に役立っていることを理解する学習と対になる形で、本単元を位置づけた。交通上の問題を、自分たちの命を守ってくれる救急隊の立場から見つめ、自分たちの問題として再認識するところを出発とし、草加市をどういうまちとしていくのか、そして自分たちが一市民として何ができるのかを考えさせる単元として設定した。</p> <p>②教材について</p> <p>ア 交通上の問題</p> <p>本実践では、交通上の問題として、県道足立越谷線の交通渋滞を教材として取り上げた。交通上の問題の教材化の特性は大きく3点ある。</p> <p>まず1点目は、交通上の問題はどの児童にも共通体験として存在するという点である。児童に限らず人は移動する生き物であり、日常生活を営む上で移動は欠かせない。児童も登校は徒歩で、また学校終了後、友達の家や習い事に行く際は自転車などを使って移動している。休日には家族でクルマや電車などを使って買い物や旅行をしている。また、交通は、人間の移動だけでなく、物の移動も含まれる。我々がスーパーなどで手にすることのできる商品は、輸送によって運ばれている。輸送手段はトラック、鉄道と様々な交通手段が挙げられ、我々はその恩恵を十分に受けていると言える。このように、交通は児童の生活を支え、ごく身近に存在しているものであるため、イメージとしてとらえることが大変容易であるということが挙げられる。</p> <p>2点目に、交通上の問題は地域の問題として児童の思考内で結び付けやすい点である。児童の生活</p>					

範囲の中に交通は存在している。そのため、様々な問題をとらえやすい。道が細くて通りづらい通り、交通量が激しく危険な道、歩道がなくて注意しながら進まなくては行けない道、生活を送る上で不都合や不便を感じている問題は多く存在している。それらを地域の問題としてとらえ直し、課題解決に向けて考えていくことがしやすい特徴がある。

3点目は、児童が問題の解決のために具体的に考えることが可能であり、さらに考えたことを実際の行動に反映しやすいという点である。先にも述べた通り、交通上の問題は児童にとって非常に身近であり、さらに地域の問題としてとらえやすい。よって、その解決策を考える活動にも自分たちの問題として切実感をもって取り組むことができ、地域の具体的なイメージを共通認識としてもちながら、友達と案を策定することが可能である。また、交通はいつでも身近に存在しているため、すぐに考えたことや学んだことを行動に移すことが可能である。そして、その行動をいつでも振り返り、自己評価し、次の行動にフィードバックすることができる。

イ 緊急車両

本実践では、交通上の問題を児童に把握させるにあたり、緊急車両、とりわけ救急車の走行を教材化し、提示したいと考えた。草加市の平成22年度の救急隊出動は9765件であり、1日26件以上の計算となる。過去5年間を遡っても、救急件数は毎年8000件を超え、その中には、「救急車で行けば、早く診てもらえるから」、「タクシーだとお金がかかるから」、「どこの病院に行けばよいか分からないから」などといった、緊急性や重症感のない救急車の要請が含まれており、本当に搬送が必要な傷病者に救急車が回らないといった問題も出てきている。草加市では、命に関わる傷病者の搬送を優先させるために、救急車の適正利用の協力と理解を市民に求めている。

救急車が現場に到着するのにかかる時間は、その時間帯の道路状況が大きく関わってくる。平成22年度草加市における平均現場到着所要時間は7.7分であった。所要時間は消防署の分布や人口密度などにも左右されるので、一概に道路状況だけが影響を及ぼすものではないが、実際の救急隊の話から、交通量の多い少ないで走行の仕方が変わると言う。渋滞している道を救急車で走行する際は、渋滞列の脇を走行することになり、その際他のクルマと接触しないよう注意して運転をしている。また、列の間や交差点などにクルマなどが進入してくる可能性もあるので十分気を配っている。結果、救急車の速度は低下し、到着所要時間は増加し、体感ではあるが1、2分は時間が変わってくるという話である。

救急隊は市民の命を守る仕事であり、市民はそのサービスを楽しむ立場にある。渋滞の問題は、自分たちの利便性や欲求のために使用しているクルマの過度な走行により発生する交通量の増加によって、自分たちが享受するはずのサービスが保障されなくなることを意味する。それでも、個人の快適さを優先しクルマを使い続けるか、市民、社会全体の利益を優先してクルマの利用を控えるかというところに葛藤やジレンマが生まれ、解決しなくていけないという切実感を生むことにつながるのである。

③指導のポイント

本実践は、「交通渋滞問題を児童に把握させるための工夫」、「救急車を教材化した学習計画の工夫」、「社会参加の視点をもって協議及び合意形成を行う際の工夫」の3点に指導の重点を絞って行っていく。

ア 交通渋滞問題を児童に把握させるための工夫

渋滞の問題を児童に自分たちの問題として切実感をもってとらえさせたい。実態調査から、草加市の道路は渋滞していると認識している児童は学級の半分以上を満たないことが明らかになった。(詳細は児童観)このことから、児童にまずは草加市の道路の交通量は多いという事実を目を向けさせる必要が生じてくる。そこで、草加市の道路の様子を撮影したVTRの活用を図りたい。その際、VTRを視聴させ、渋滞が多いことに目を向けさせた後、学習問題で渋滞緩和を図る県道足立越谷線のVTRを提示する。

この県道が消防署と学校とを結んでいる主要道路で、救急車が学区域に向かう場合はこの道路を使用することになるという事実を併せて伝えることで、ますます渋滞の問題性を強調させたい。

草加市の道路は交通量が多く、自分たちの地域に救急車が向かう際に使う道路も渋滞が起きているという事実をつかませた後、さらに渋滞問題を自分たちの問題として把握させるために、クルマの使用状況を自分たちの生活と関連させて考えさせたい。渋滞を引き起こすクルマはよくないという考えに児童の思考が移るタイミングで、クルマの利点や自分たちの暮らしを支えている事実を提示する。その際、実調査の結果を資料として活用する。「クルマは必要か」という問いに8割近くの児童が「必要だ」と答えていることや、保護者のアンケートの結果から、病院や習い事、買い物などにクルマを頻繁に利用している事実などを提示して、クルマは自分たちの生活を支えており、クルマがなくては困るということに気づかせたい。

交通上の問題は社会的ジレンマを内包する問題の一つである。社会的ジレンマとは、「長期的には公共的な利益を低下させてしまうものの短期的には私的利益の増進に寄与する行為か、短期的な私的利益は低下してしまうものの長期的には公共的な利益の増進に寄与する行為のいずれかを選択しなければならない社会状況」を指すと説明されている（参照『藤井聡『社会的ジレンマの処方箋』ナカニシヤ出版、2003年、p.3.』。本実践で児童に理解させたい社会的ジレンマとは、「生活に便利で快適なクルマを多くの人が使えば続けると、交通渋滞が発生し、自分たちの命を守ってくれるはずの救急車のスムーズな走行を妨げることになり、結果自分たちの命を守るというサービスを享受することが保障されなくなる。個人の利益の追求が、社会の利益の低下につながり、結果個人の利益低下につながってしまうジレンマ」である。このジレンマの仕組みはパワーポイントで視覚的に分かりやすく児童に提示したい。

イ 救急車を教材化した学習計画の工夫

渋滞の問題を自分たちの問題としてとらえさせるために、緊急車両とりわけ救急車と渋滞と関係性を児童にとらえさせたいと考える。救急車が迅速且つ安全な走行ができないことは、自分たちの生活にも大きく影響があるという事実である。そこで、本単元に入る前に、総合的な学習の時間を活用し、1時間、救命講習会を行う。実際に救命士による心肺蘇生法やAEDの使用方法などを講習する時間を設定する。この講習会を通して、児童に命の大切さと迅速且つ正確な対応が命を救うことにつながるということに気づかせたい。講習会終了後には、本校校長名で作成した修了証を各自に配布することで、救命に対する意識や意欲の維持・向上を図っていききたい。

救急隊の考えや仕事の様子は、インタビューVTRを活用してつかませたい。具体的には「救急車を運転する際に気をつけていること」、「運転をしていて困ること」、「時間帯によって道が混んでいる状況について」の3点について答えているVTRを作成し、児童に視聴させたい。救急隊には、事前に授業の趣旨を伝え、道路渋滞と職務遂行の関連に重きを置いて話をするように伝える。また渋滞時とそうでないときの到着時間差は具体的な数字を言うようにも伝え、児童が1分遅れたらどのくらい命が助かる確率に影響があるのかを具体的にイメージできるようにしたい。

ウ 社会参加の視点をもって協議及び合意形成を行う際の工夫

地域の問題について主体的に考え、解決策を策定するという活動は、間接的なものではなるが一つの社会参加の形であると言ってもよい。児童が社会に働きかけ、自らの行動指針も考えていくという過程は、将来のよりよい市民の育成に十分につながっている。その社会参加の要素をさらに強めるために、地域の大人と協同して学習をしていく場面を作りたい。児童が考えた案を発表する場面で参会者として招くのはもちろん、案を友達と協議したり合意形成を図ったりする段階から大人に加わってもらい、共に取り組むことで社会に参加しているという実感を持たせたい。大人は、保護者を招き、クルマを日常的に使っている立場から発言をお願いする。また、発表会には救急隊の人々にも参加してもらい、感想

や批評をしてもらおう。実際に救急車を運転している人々から直接意見を聞ける経験を通して、児童は成
就感や達成感を抱くと同時に、地域の問題解決に取り組むことの重要性を認識することにもつながると
考える。

以上の3点に重点を置き、本単元を構成する。

10. 学習のながれ：

時数	学習活動・学習内容	評価規準
0 02分	<p>《救急救命講習を受けよう》</p> <p>○講師を呼んで、講習会を受ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心肺蘇生法 ・AEDの使用方法 <p>○生命を救うために必要なことを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・適切な処置が大事なこと ・1秒でも素早し対応が必要であること 	
1	<p>①講習会の感想を発表する。</p> <p>②救急隊の人たちは、救急車で現場へ向かうとき、どんなことに気を付けているかをインタビューのVTRで知る。</p> <p>③グラフから、「命が助かる可能性」と「経過した時間」の関係をつかむ。</p> <p>④再度インタビューVTRを視聴し、時間帯によって到着にかかる時間に違いがあることをつかむ。</p> <p>⑤ジレンマの仕組みを理解する。</p> <p>⑥今日の授業で分かったことと感想をワークシートにまとめる。</p>	<p>【知】救急隊の人たちが命を救うために、できる限り早く現場にたどり着こうと努力していることを理解することができる。(ノート記述)</p> <p>【知】渋滞によって救急車のスムーズな運行が妨げられ、命が助かる可能性が低下してしまう事実を知ることができる。(ノート記述)</p>
2	<p>①草加市の道路の様子を撮影したVTRを視聴する。</p> <p>②草加市の地図を読み取る。</p> <p>③草加市の道路で渋滞が多い理由について、教師から話を聞く。</p> <p>④日常生活とクルマとのかかわりについて話し合う。</p> <p>⑤学習問題を作る。</p>	<p>【資】渋滞とはどういう状況なのかVTRなどの資料から気付くことができるか。(ノート記述、行動観察)</p>
	<p>救急車を早く現場に到着させるためには、草加市をどうしたらよいかアイデアを考えよう。</p>	
③	<p>①全体で、どんなアイデアがあるか話し合う。</p> <p>②グループで班になって、意見を交流し合う。</p>	
4 5 6	<p>①共通のテーマでグルーピングをし、意見を練り上げる。</p> <p>②必要に応じて調べる活動を行う。</p> <p>③発信方法を考える。</p>	<p>【関】自分たちのテーマについて興味をもち、進んで調べたり意見を出し合ったり、プランをまとめようとしているか。(行動観察)</p> <p>【資】渋滞削減の案を考えるために、友達の話の聞いたり資料活用したりして調べているか。(ノート、行動観察)</p>
7 8 9 10	<p>①CM作りでまとめることを知る。</p> <p>②CMの流れを話し合う。</p> <p>③撮影を行う。</p> <p>④上映会をする。</p>	<p>【思】ほかの班の発表やゲストの考えや感想を聞き、これからの草加市の交通について意見や考えをもち、意見や感想を表現している。(ノート、行動観察、発言)</p>

※学習で使用した教材やワークシート、学習風景を撮影したビデオや写真、指導計画書などを添付して提出してください。